

風の妖精と仲間達

徳之島町立亀津小学校

6年 吉松 美早紀

ある森の中に5人の妖精の子供たちが仲よくくらしていました。風・火・水・土・樹の妖精でした。みんなそれぞれの役割を持ち、毎日働いていました。ところが、5人の妖精の中で悩みを持っている妖精がいたのです。それは風の妖精でした。

「4人は上手に働けていいな。ぼくは、何の役に立っているのかなあ。風を強く吹けば、嵐になってみんないやがるし、弱く吹いてもあんまり喜ばれないしなあ。」

そうしてだんだんと働かなくなりました。最初に気がついたのは、樹の妖精でした。

「どうしたの、風の妖精くん。このごろ働いていないでしょ。樹の葉がゆれないもの。」

「だってぼくは、君みたいに花を咲かせたりおいしい実を実らせたりできないんだよ。」

と言ってどこかへかくれてしまいました。

次の日、風の妖精のところへ4人の妖精がやってきました。

「風くん、どうしちゃったの。みんな心配しているんだよ。」

火の妖精が声をかけました。そして、みんなで風の妖精の話を聞いてあげました。話によると先日の嵐のことを気にしているようです。

「ちょっと強く吹きすぎただけなんだ。みんなぼくのこといやがってるよね。」

「そんなことないよ。ぼくだって失敗して牛さんの牧草焦がしちゃったんだよ。」

「でも君は、すぐに村の人たちに使ってもらって喜んでもらっているじゃないか。」

風の妖精は、もっと落ち込んでますます風をおこさなくなりました。

風のない日が続きました。村の人たちも、風がないと心配しはじめました。それでも、風の妖精は風を吹こうとはしません。そこへ、水の妖精が現れました。

「風くん、聞いて。風が吹いていないからみんな困っているのよ。」

「そんなことあるわけないよ。君みたいに、うるおいを与えて喜んでもらうことなんかできないんだから。」

「でも、風がないから海にいる船は帰ってこれないのよ。私だって、風で雨雲を運んでももらわないと遠くまで雨を降らせられないのよ。」

水の妖精が説明しても、風の妖精は、前の嵐のことが忘れられず風を吹こうとしませんでした。

夜になると、土の妖精が現れました。

「おい、おい、どうしたんだい。元気がないなあ。君のことは誰もきらってなん

かないよ。草や花たちが種を飛ばせなくて困っているし、畑で汗をかいている人たちも君の優しい風を待っているよ。」

風の妖精は、みんなの説得に自分にも役に立っていることがあるかもしれないと思いはじめていました。それでもまだ風をおこす勇気がでませんでした。その夜は、他の4人の妖精たちは、風の妖精のそばについてあげました。

次の日、みんなが目覚めると、みんなの先生である空の妖精が現れました。

「まだ出てこないのですね。では、風くんはそこでお聞きなさい。」

と空の妖精が話しはじめました。

「風くん。あなたはきらわれてなんかいません。なぜなら、みんなの役に立っているからです。風車を回して水をくんだり、電気をおこしたり、人々にここちよさを与えたり、ちゃんと役に立っているんです。先日の嵐のことを気にしているのだったら心配いりません。失敗は、だれにでもあることなんですよ。そういう失敗を経験しながら成長していくのですよ。あなたには、素晴らしい仲間がいるではないですか。」

すると、風の妖精が岩の陰から出てきました。

「水は、大地をうるおし、大地は、木々や植物を育て、木々はたくさんの実りを与え、火は、人々の生活のためには、なくてはならないもののなのです。そのすべてに、風くん、あなたが必要なのですよ。この星には、まだたくさんの妖精がいます。みんなで助け合いながらこの星のためにがんばりましょう。どうですか。風くん。」

風の妖精は、うなずきました。

「ぼくも役に立っていたんだ。みんなのためにがんばらなきゃ。」

そういつて風の妖精は、空の高い所へ行き風を吹き始めました。みんなも、ほっとしてそれぞれ働きにでかけました。

それからは、みんな一生懸命に働きました。失敗したとしても、仲間どうしで助け合い落ちこむ者もいなくなりました。5人の住んでいる森がすばらしい森になったのはいうまでもありません。

